

## まえがき

- 1 本書はこれまでに雑誌や記念論文集などに発表してきた論文を集成して補訂し、さらにいくつかの新稿を加えたものである（詳しくは、あとがき参照）。第一章と、本書の結論とも言うべき第二章ははじめに読んでほしい。
- 2 既発表のものには様々な加筆・訂正を加えた。
  - 2・1 用語やスタイルの統一をはかった。
  - 2・2 本文の改訂、用例の追加・削除を行なった。このため用例番号は初出と一致しない場合がある。
  - 2・3 改訂は、本文に手を入れた場合（特に断らない）と、末尾に「補説」を記した場合と、さらにその両方の場合とがある。ただし、「追記」は初出当時のものである。
  - 2・4 大幅な変更を行なった章もある。
- 3 論文名は「」で、書名は『』で、雑誌名は《》で括った。漢字の旧字体・新字体は実際の論文名・書名・雑誌名の字体によった。ただし、編著者名は新字体に統一した。
- 4 研究論文・研究書（リストは巻末の「参考文献一覧」）の引用にあたって、【】内は安田が補ったもの、「〈略〉」あるいは「……」は安田が省略した部分である。
- 5 用例の扱い方。
  - 5・1 本文はできるだけ複製本・版本や写真によったが、活字翻刻によったものもある（依拠本のリストは巻末

の「用例一覧」。

- 5・2 各章ごとに用例に番号を①から振る。
- 5・3 濁点・句読点は補わない。ただし、万葉仮名文献については、句の切れ目にスペースを置く。
- 5・4 濁点等を補ってある活字翻刻（たとえば『新編国歌大観』『うつほ物語（前田本）』）によった場合、濁点等は翻刻のままとする。
- 5・5 用例文中の該当語は、見やすいようゴチック活字とする。
- 5・6 原文における小字二行割りの部分は、長い場合は小字にせず《》で括って示す。
- 5・7 作品の成立年または刊行年を書名の前にアラビア数字で記すことがある。写本の年代を示す場合は写本名の前にアラビア数字で記す。
- 5・8 用例の引用に際して途中を省略する時は「……」とする。
- 5・9 歌に歌番号を記す場合は、『万葉集』と八代集は松下大三郎・渡辺文雄『国歌大観』の番号、その他は『新編国歌大観』の番号による。
- 5・10 現代の国語辞典では、白抜き数字その他その辞書独自の表記があるが、引用する際は一般的な表記に改めた場合がある。
- 6 日本語をローマ字表記する場合、ヤ行子音は *ya*、*mu*、*yuka* のように *y* を用いた（引用部分は当然、原文どおり）。音声記号による場合は [ja] [mjuka] である。
- 7 上代語をローマ字表記する場合、音節の甲類、乙類は「[a,io,u]」のようにアラビア数字の 1（甲類）、2（乙類）で示す。

## 目次

まえがき	i
第一章 日本語数詞のさまざまな系列	1
第二章 日本語数詞の古い形	11
第三章 古典語の数詞と助数詞	25
第四章 日本語数詞の語源	37
第五章 日本語数詞の倍数法	59
第六章 個数詞	75
第七章 一〇およびその倍数を表わす個数詞	97
第八章 一〇〇およびその倍数を表わす個数詞	131
第九章 和語数詞による端数表現	153
第一〇章 「みそもじあまりひともじ」から「みそひともじ」へ	177
第十一章 『枕草子』の「ひてつくるまに」 ——沖繩などの方言における個数詞「ヒテツ」（1個）に関連して——	197
第二十二章 数詞ツツの意味と語源	213

第三章	日数詞	239
第四章	和語数詞による暦日表現とツイタチの語源	293
第五章	ヒトヒ(1日)とフタヒ(2日)	319
第六章	東北方言の日数詞ムヨカ(6日)——『言海』に紛れこんだ東北方言	335
第七章	人数詞	351
第八章	人数を意味しないヒトリ	385
第九章	唱歌詞	403
第二〇章	シ(四)からヨンへ——4を表わす言い方の変遷	419
第二一章	シチ(七)からナナへ——漢語数詞系列におけるナナの成立	443
第二二章	ヨン(四)とナナ(七)	459
第二三章	稲荷山鉄剣の「七月中」	483
	あとがき	499
	日本語数詞研究文献目録	(27)
	参考文献一覧	(15)
	用例一覧	(9)
	索引	(1)

## 第一章 日本語数詞のさまざまな系列

### はじめに

日本語において用いられてきた日本語本来の数詞について考えるのが本書の目的である。この日本語本来の数詞（以下、「和語数詞」と呼ぶ）については、明治時代の末以来、日本語系統論の方面から注目され、東洋史学者の白鳥庫吉や言語学者の新村出などがいくつかの論文を発表しているが、それらは「そと」との比較を急ぐあまり、和語数詞が古くはどういう語形を持っていたのか、という最も基本的なことがらの究明をおこたっている。一方、国語史学者による実証的研究も決して多くない。<sup>(2)</sup>

現代でもそうであるが、数詞は古くから表意文字である漢字（漢数字）で表記されることが多い。そのため、数詞の古い語形について論ずるには、仮名やローマ字で書かれた確実な用例を探し出すことが先決であるが、これにはかなり手間ひまがかかる。しかも、そうして手間をかけて得られた「用例」には、学者・文人・歌人が勝手に作り上げた擬古語も少なくないし、現代の学者が机上で類推により作り上げた形もありうるから、十分に吟味する必要がある。<sup>(3)</sup> そうしなければ、実在しない架空の語形に基づく無意味な論が行なわれることにもなりかねないのである。